

私たちの青春

北九州市八幡東区 石田 茂雄

チューン、チューン……小銃の弾が飛んでくる。付近に散らばっていた戦友が伏せている。ドカーン……と大きな音がして目が覚めた。

頭の上で、軒下のスズメの鳴く声と、誰かが車のドアを閉める音だった。

50年も前の戦場のことが今でも何か事あるたびに、夢や思い出に出てくる。

私は、昭和13年1月現役兵として満州（現在、中国東北地方）に渡った。冬になると、零下35度以下……豆腐もこんにゃくも石のように凍る。極寒、満州ソ連国境の警備の役を経、昭和16年3月現役満期除隊となり、懐かしの日本に戻り、両親のもとで約半年家業の手伝いをしてきた。

昭和16年9月、消防士になるため福岡県消防訓練所2期生になり、在学福室長として訓練中、10月8日に召集され、昭和17年2月門司港を出港、シンガポールに向かった。

そして、マレーシアに上陸。菊114連隊に野戦補充要員として転属され、4月1日ビルマ作戦参加のため、シンガポールを出港した。堂々たる45隻の輸送船団でインド洋を西に向かい、ラングーンに上陸。以後菊部隊の一下士官としてビルマ作戦に参加、昭和22年8月復員した。

ビルマ作戦始めの頃、中隊の兵力は中隊長以下約160名だった。その後、転戦中250名くらいの兵員が次々と補充された。

しかし、終戦までの間に4度、中隊は全滅に等しい打撃を受け、降伏直後まで生き残れたのは、30名足らずであった。特に、ミートキーナの戦闘では250余名全員が玉砕した。

私は、当時、中隊を離れて西機関（西大尉を長とする特別な任務を持つ部隊で、時には軍服を脱ぎ、現地人の服装をして敵の情報収集、現地人の宣ぶ工作等の任務を持つ少数部隊）に勤務し、フーコン作戦に参加していた。

後日、他隊の生存者から聞いた話によれば、青木少尉以下最後に生き残った兵は、全員敵陣地に突入、靖国の神と散っていったという。

戦後、度々戦友会を行っているが、生存者のほとんどが体のどこかに弾傷を受けている。敵を攻め、また敵から追われ混戦乱戦が続いていたあとで、昨日まで故郷を語り、今朝食事をともにした友は、倒れ傷つき後方に送られているのに自分だけが無事だった。間一髪の危険を何回となくくぐり抜けてきたことを考えると、生き延びた自分が不思議でならない。

ビルマ作戦中、私の中隊は中隊長が8名替わった。その中の5名は戦死し、うち2名は私の目の前で出来事だった。このようなことは、ビルマの戦線では数多くあったことと思う。

戦争の末期には北ビルマ「フーコン」（この地域は、現地人は死の谷と言う）にいたが、ある日突然、敵の空挺部隊が後方に降下し、要所要所を占領した。糧秣倉庫や野戦病院も襲った。転進するにも道はなく、食料なく、衣料もなく、ただ重い銃と背嚢を背に熱帯特有の豪雨に打

たれながら、悪路を、川の中を、マラリヤや赤痢と戦いながら歩き続けた。攻めるときには部隊の最前線を、退くときには最後尾を歩いたことも何度かあった。しかも昼間は敵機に追われるので、夜間の行軍が多かった。

ビルマの北西インドとの国境チンドイン河の流れる所から、南のタイ国境チャイトの集落まで、毎日20kmから30kmの道を何日かかって歩き続けたであろうか、全行程1200kmに及んだ。途中、白骨と化した兵隊の姿何十体かを見た。思い出すたび、亡き戦友の姿が目に浮かび、一人涙ぐむことがある。

そのなかの、出来事を一つ二つお話ししよう。

・チンドイン河の斥候

北ビルマ、ポーピン駅より西北方約20kmの所にビルマ最大のインドジイ湖がある。その南方にロントンという地名のみで集落も何もない所があって、その場所に、急作りの兵舎を作り警備に付いたことがある。

軍最前線の所で、陣地構築をしながら、敵の情報収集をするためタマンティ、エボミーと国境のチンドイン河まで進出した。

我々の梅田小隊は、将校斥候となりロントンを出発。約1ヶ月間山を登り、谷を下り、道なきジャングルをダー（現地人のナタのような物）で切り開きながら、獣道を広げながら、やっとチンドイン河の支流に出た。丸木舟に装具を乗せて、山で切った大きな葛のつるで川の中を引きながら、3日間ジャブジャブと川の中を歩いた。腰の深さくらいになって、分散して丸木舟に乗り川を下った。フーコンの秘境とでも言うか、おそらく日本人がこの道を通ったのは我々が最初で最後ではなかっただろうか。

途中、何日か河の洲で露営をした。夜になると、近くのジャングルでトラの遠吠えを聞き、不気味な思いの毎日だった。時折、長い尾の猿の群に出会った。4、50匹の猿がキャッキャッと鳴きながら頭上を枝から枝へと飛んでいって、我々を楽しませてくれた。

また、子連れの象の群にも出会った。七面鳥のような大きな鳥も見た。自然の楽園だ。

エボミーは山塩の取れる所で、塩分を含んだ山水を大きな鍋で煮詰めて塩を作っていた。

チンドイン河の岸に着くと、果てしない草原とジャングルが続き、遙か彼方に標高2000～3000mの山々が連なるアラカン山脈が見えた。

丸木舟で川を渡り、インド兵舎を焼き払ってロントんに引き上げた。斥候期間約1ヶ月、一人の事故もなく無事帰隊したのは何よりだった。後日分かったことだが、この斥候は、ビルマ軍で最初にチンドイン河を渡った部隊だったそうだ。

・フーコン転出

我々は、フーコンから半死人のような状態でやっとポーピンの野戦病院にたどりついた。ポーピンの街も毎日の爆撃で、フーコン進出の時とまるで変わって焼土と化していた。

野戦病院と言っても名ばかりで、衛生兵が何人かいたが、フーコンから後送された傷病兵が数百人、まるで亡者の村のようとうごめいていた。

負傷していても治療をするところもなく、栄養失調で半病人が多く、それに毎日の雨で体が

腐っているようになって、手や足には蠅が止まり、傷口には蛆がわいている。寝たまま大雨に打たれ、ワイワイ泣いている兵もおれば、そのまま屍になっている兵もいた。

皆、患者護送の列車が来るのを待っているのだ。夜が明けぬうちに出発しなければ、また敵機にやられる心配がある。心は急ぐがなかなか列車が来ない。

ポーッと東の空が白みかける頃列車が来た。独歩患者（杖をついて一人で歩ける患者）は、我先にと後方の有蓋車（屋根がある車輛）に乗ったが、重傷患者を乗せるには時間がかかった。

列車がポーピン駅を出発する頃には、すでに東の空は太陽が顔を見せていた。前の方の車輛は無蓋車（屋根がない車輛）で、担送患者がまるで鮪を並べたように寝せてあった。後方の有蓋車4輛くらいには、独歩患者がぎっしり乗っていた。

私は、最後尾の有蓋車の入口に、かろうじてしがみついた。同行した西機関の患者3名も同じ車輛に乗れた。

軍用列車がポーッと汽笛を鳴らしてポーピン駅を発車して10分もしたと思う頃、上空を見ると、もう敵機が3機、我々列車の上空を旋回していた。「これはいかん」と思い列車の機関手に知らせるため、歩兵銃を2人で10発くらい空に向けて撃った。列車は徐行を始めた。

私たちは、列車から飛び降り、列車の進行方向と反対の方向へ無我夢中で走り、畑の小さな凹地にへばりついた。凹地には、泥水がたまり腹は水浸しになった。敵機が爆撃を始めた。大きな拳大の石ころや土砂が、ザーッと落ちてきて鉄兜に当たった。

爆撃を終えた敵機は、今度は旋回を繰り返した。何回か銃撃を繰り返し、30分位で飛び去っていった。

夕方になって列車に帰ってみると、200人位の負傷兵が手や足が飛び、無惨な戦死をしていた。わずか30分位の出来事であったと思うが、何時間も経ったように思えた。

まるで生地獄とは、この事であろう。運良く生き残った者は、30名位だったそうだ。

私たちの戦争は、何だったのか？

お互いが一銭五厘の赤紙一枚で召集され、人生で1番楽しいはずの青春時代を祖国を離れ、北は満州（現在、中国東北地方）ソ連国境零下30度、鼻毛につららの下がるようなところから、南はマラリヤやアメーバー赤痢に侵されながら異国の地で戦った。ビルマだけでも、19万人が異国の土と化した。

これはみな、「お国のため」を合い言葉に出陣した戦友たちが……である。

今日の平和な日本がある陰に、こうした多くの尊い命を忘れてはならない。

私は、今年で78歳。人生も末期に近い年齢になるまで割と元気である。

生涯忘れることのできないビルマ戦線のこと、目前での戦死、また負傷して後方で亡くなった数多くの戦友のこと……自分が実際に身を持って体験した真実を、子供に、孫に伝えておきたい。現実には、今も世界では戦争が、繰り返されている。もう二度と悲惨な戦争を繰り返すことがないように、……。

亡き戦友のご冥福を祈り、末永く平和が有るように、戦争のない平和な世界になるように祈る。